

シューベルトの貧乏が生んだグーラシユ・シューベルト風

『野ばら』や『魔王』、『未成交響曲』など、かずかずの不朽の名作を残したフランツ・シューベルトは、一七九七年、ウィーンで学校を経営する父親の十一番目の子として生まれた。そして、一八二八年、三十二歳の短い生涯を終わるまで、徹底して貧乏のし通しだった。

父の学校の経営状態があまりよくなかったこともあり、十七歳でしづぶ教壇に立たされたが、授業中よくぼんやりしていたり、生徒そっちのけでゲーテの詩やモーツァルトのメロデーを口ずさんだり——といった奇行がしばしばだったため、父兄から何度もねじ込まれるなど、そのたびにいつそ学校をやめようかと深刻に落ち込むのだった。が、その結果、年額四十フロリンの収入を失うことを思うと、シューベルトはいつもそれを実行できなかった。その四十フロリンは、当時のウィーンでも、作曲のための五線譜を買うとあとは食べていくのがやっと。そのためシューベルトは、いつも水とパンだけで空腹をしのがなければならなかった。それでも彼には、それ以上の収入を得る当てがなかったのである。

シューベルトの恵まれなかった生涯を物語るエピソードとして、彼は無一文になると、

